

筑波医療科学

Tsukuba Journal of Medical Science

On-Line Journal

URL <http://www.md.tsukuba.ac.jp/public/cnmt/Medtec/journal.htm>

TJMS 2014; 10(1): 1-8

有波 忠雄 教授 最終講義



筑波医療科学 第10巻 第1号

Tsukuba Journal of Medical Science

Volume 10, Issue 1 (2014, July)

【目次】

【特別寄稿】 退職にあたってのメッセージ 1 - 4
有波 忠雄 (前 筑波大学医学群医療科学類長)

【特別寄稿】 医療科学類担当にあたって 5 - 6
野口 恵美子 (筑波大学医学医療系 教授)

【News】 第51回国立大学臨床検査技師教育協議会
. 7 - 8

【特別寄稿】 退職にあたってのメッセージ

有波 忠雄（前 筑波大学医学群医療科学類長）

医療科学類の前身である看護・医療科学類は2003年度に誕生し、私はその時から専任教員として遺伝子検査学などの科目を担当させてもらい、このたび、8期生の卒業とともに退職した。学類誕生の時から教員なので、教員としての1期生とも言える。1期生の卒業生は成長して多方面で活躍しており、それが学類にとって最大の財産であり、退職にあたって振り返ってみると、医療科学類も少しずつ発展してきていることが実感される。

色々な思い出がある。たとえば、最初の2年間にとりまとめを担当した卒業研究である。とりわけ1期生の卒業研究発表は思い出深く、いまでもその時の場面が昨日のように思い出される。



(2006年度 卒業研究発表風景 1)



(2006年度 卒業研究発表風景 2)

総合研究棟Dで行ったが、講堂のドアの外側で一生懸命に予行をしている学生さんの姿や質問タイムで教員と学生が質疑応答で盛り上がり、学生によっては対等に渡り合っていた姿に感動すら覚えた。討論時間が足りないのは残念だったが、案外それも良かったのかもしれない。授業、実習では、実験の待ち時間での実習室での学生とのとりとめのない話が、学生の将来を想像させ、楽しかった。



(2008年度 遺伝子検査学(遺伝子工学)実習風景)

在職中の最大の出来事はやはり2011年3月の東日本大震災である。私にとって学類長になって最初の年度であり、ちょうど春休みだったこともあり、多くの学生は校舎にいなかったことが幸だったと最初は思ったが、学生の皆さんの安否の確認に時間がかかった。まもなく全員の無事が確認され、ほっとした。一方、実家が被災された学生もおられた。その年は正式な卒業式は取り止めになったが、関係者や卒業生の努力で5期生に卒業

証書を渡すことができたのは幸いであったし、学類長として初めて卒業証書を手渡したことも手伝い、強く印象に残っている。



(2011年春、医療科学類学位記を手渡す会 1)



(2011年春、医療科学類学位記を手渡す会 2)



(2012年春 医学群卒業祝賀会)



(2011年春、医療科学類学位記を手渡す会 2)



(2013年春 医療科学類学位記授与式)

その年も含めて学類長として4回卒業式で卒業証書を手渡すことができた。いずれも思い出すとなつかしい。写真を眺めて改めて願うのは、卒業生のみなさんの充実した人生である。



(2014年春 医療科学類学位記授与式)

自分の研究室や専門分野に関しては、医療科学類が出来る前とできた後ではだいぶ違ったものになった。遺伝学研究の時代の流れもあったが、医療科学類が研究室の性質を一部変えた面もある。私の研究室の教員は基礎研究を目指しているグループに属していたが、その中であってより臨床を意識した研究に視点移ったとでも言えようか。その象徴が新たに出来た職種である認定遺伝カウンセラーで、その資格をめざす卒研生も2人来てくれ、ひとは既に社会に出て活躍している。その他、多くの学生が卒研の研究室として選んでくれたことをとても感謝している。

学類ができた最初の4年間は看護・医療科学類であった。振り返るとこの時はまだ医療技術短期大学部の色彩、臨床検査技師養成の短大や専門学校の伝統を残していた。2007年度に医療科学類として学類が独立してからは、少しずつ学類の独自性について整備がなされてきた。私が学類長を勤めさせていただいたのは2010年度からで既に医療科学類になって3年が過ぎており、浦山前医療科学類長のもと、医療科学類の基盤が整備された頃である。学類長になって、全国の臨床検査技師教育の会議に出席することになった。専門学校の

悩みも伺った。国立大学の臨床検査技師教育機関の集まりである国立大学臨床検査技師教育協議会に出席してみると筑波大の医療科学類が特別な存在であることが実感された。臨床検査技師養成を前面に出していない点や大学院で検査技術科学の専攻がない点などである。名称を検査技術学ではなく、医療科学として学類を設計した先輩の先生方の意図をあらためて実感させられた。ところがカリキュラムの内容はそれにともなっておらず、他の大学とほぼ同じで専門学校のを基本としていた。いや、むしろ、カリキュラムの大綱化の流れを受けてよりフレキシブルなカリキュラムを組む私立大学より硬直した面もあった。筑波大学の特徴を追求し、発展させるにはどうしたらよいか悩むところであった。偶然、私の学類長在職中には、G30留学生も含めて編入学入試資格の拡大と国際医療科学主専攻の設置によりカリキュラムの多様化が図られ、他の大学にない独自の路線を歩み始める時期に恵まれた。ミッション再定義という名のもとに、文部科学省による全国の国立大学の役割の再定義が行われたが、昨年は医療学類が属する保健系の分野の再定義が行われた。そこで医療科学類は英語名の医科学 (Medical Sciences)を中心とすることで認められた。医療科学類を創設した先生方の意図である方向でさらにすすむことのお墨付きが得られたともいえる。今後は医療科学類のますますの発展と卒業生の活躍を学外から楽しみにしたいと思う。

私は筑波大学に教員として採用される前に発達障害を中心に14年間臨床を行っていた。その過程で、発達障害の原因を追求するため遺伝学を学び、平成元年から筑波大学で遺伝医学の研究、教育に

たずさわってきた。大学入学時にはそもそも筑波大学そのものがまだなかったし、医療科学類の皆さんにこのようなメッセージを残して筑波大学を退職することになるろうとは、まったく想像すらできなかった。学生の皆さんの人生がどのような展開になるか、自分の人生の予想外の展開も楽しみにしてほしい。

学生の皆さんにお願いである。私は、筑波大学を退職してからは再び発達障害や肢体不自由児、重症心身障害児者を主な診療の対象としている病院で診療に従事している。大学在籍中は非常勤で臨床の勤を失わないようにしていたつもりでいたが、フルタイムでこの仕事を再開してみると、大学にいた 25 年間はやはり臨床はアマチュアであったと申し訳ない気持ちでいる。今やっている仕事は、こどもが大学や就職、社会人になるための準備段階でのつまづき事を少なくすることである。その立場であらためて振り返ると大学在職中でももう少し学生の皆さんにきめ細かい配慮が出来たのではないか、という悔い、学生に申し訳なかった気持ちが残っている。学生の皆さんも困難な点があったら、躊躇せず相談してほしいと願う。相談すればなんとすることが多い。相談する姿勢が大事なのである。

いろいろな職種のスタッフと仕事をする私の毎日であるが、臨床検査技師のスペシャリティとしての仕事は不可欠であると共に、臨床検査技師が不足している事も実感している。社会での臨床検査技師の重要性をあらためて実感するとともに、医療だけでなく、福祉の世界でも活躍の場がある。関心がある方は、ぜひ遊びに来てほしい。



有波先生、お疲れ様でした。

【特別寄稿】 医療科学類担当にあたって

野口 恵美子（筑波大学医学医療系 教授）

有波忠雄先生の後任として平成 26 年 4 月 1 日から医学医療系遺伝医学の教授に就任いたしました野口恵美子です。どうぞよろしくお願ひいたします。

私は生後数か月のころに風邪をひいたのをきっかけに頻繁にゼイゼイするようになり、その後喘息と診断され長い闘病生活が始まりました。今でも喘息の発作にたまに悩まされていますが以前のようなひどい発作は起こりません。小学校時代には年間数十日休むことを余儀なくされ、入院も 7 回ほどしました。病院通いを頻繁にしていたので自然と医療従事者にあこがれるようになり、1985 年に筑波大学医学専門学群(現在の医学類)に入学しました。喘息の治療は私の幼少期から比べると劇的に進歩しており、もし私の幼少期に今の喘息治療を受けることができていたならば、私は病院に入院することもなく過ごし、今、ここにいることはなかっただろうと思います。大学生活はいろいろなことにもものすごくモチベーションの高い学生であったと書きたいところですがサークル活動をしてほどほどに授業に出席するごく普通の学生生活を過ごしていました。卒業後に筑波大学附属病院の小児内科にすすみ、小児科の初期研修を開始しました。小さな重症患者さんと過ごす日々は、笑顔で手を振って家に帰っていく子供がいる一方で、入院生活が長引いたり、残念ながら亡くなられたりという様々な症例を経験することができま

した。3 年間の研修をへて筑波大学の大学院に入学しました。

大学院のときは柴崎正修先生（前筑波技術大学教授）のご指導のもとアレルギーの研究、主にダニアレルゲンに関する研究を行い、私はダニアレルギーが強いので少しゼイゼイしたり、鼻づまりをおこしながら研究をしていました。柴崎先生からの昔から変わらない暖かい励ましのおかげで今まで研究を継続できたのだと感謝しています。大学院の半ばごろからたまたま同じフロアにあった遺伝医学教室の濱口秀夫先生（前つくば国際大学教授）に声をかけていただき、喘息の遺伝学の研究をすることになりました。当時(1990 年中盤)はヒトゲノムの配列もまだ十分に解明されておらず、遺伝の研究といえばメンデル遺伝病の研究が主流の時代でした。濱口先生はそれを高脂血症等の common diseases にひろげ、私にも喘息の家系解析をやりませんかと声をかけてくださいました。濱口先生の先験的な視点には改めて感動いたします。さらに前医療科学類長の有波忠雄先生から遺伝解析の極意を習いました。有波先生は本当の初期のころから PC を使いこなしており、統計解析等をととても得意とされておりました。遺伝学は実際に手を動かす実験と同じくらい解析が重要で、有波先生のご指導により研究の方向性が定まったと思います。遺伝の研究を始めたあとは家系や患者サンプルを集めるために奔走する毎日で、大変でしたが新しいことがわかりそう、面白そう、といっ

たわくわくした気持ちで日々を過ごしていました。この大学院の時の経験が私の最大の転機になり、そのまま研究を継続するきっかけとなりました。医学部に入学する学生のほとんどが臨床医になるためには入学し、ごく一部が研究者になるために入学します。私は大学入学当時は完全に前者のほうであり、今ここで研究をメインにやっている自分をとくとき不思議に思うことがあります。ではなぜ研究をしているのかというと、私にとっては遺伝やアレルギーの研究がとても面白いから一言に尽きる、と思います。私は高校生のころに風邪をひくと必ず 2-3 日後に喘息発作が起こることに気づいて、とても不思議に思っていました。研究をするようになってライノウイルス感染により発作が誘発されることを知り、感動したのを憶えています。研究していると自分が知らなかったことや世界で初めて自分だけが知っていること（大げさですが）がわかるのでとてもワクワクすることが（まれに）あります。ゲノム解析の場合には患者さんの病気の診断につながるので患者様のためにもなるのでよりやりがいがあると思います。

＜医療科学類のみなさまへ＞

みなさんが小学生のころ（2003 年）にヒトゲノムプロジェクトが終了し、一人のヒトのゲノムがすべて解読されました。2003 年にヒト 1 人の全ゲノムを解析するのに必要とされたコスト 3 兆円でした。2005 年に新しいタイプのシーケンサーである次世代シーケンサーが開発された後は急速にゲノム解析コストが減少し、現在はヒトゲノム一人あたりのコストは 10 万円程度となっています。次世代シーケンサーの登場によりゲノム解析は新たなパラダイムシフトを迎えています。ゲノムにはその人の体質に関する情報が存在し、これからは病気の診断だけでなく、予防につなげていこうとする試みがされています。ゲノムの専門家の需要は今後高まっていくと予想され、皆さんがゲノム研究に興味を持っていただけるように、これから頑張っていきたいと思っています。

【News】 第 51 回国立大学臨床検査技師教育協議会

平成 26 年 5 月 23 日（金）、筑波大学（会長校）が当番校として、大学会館（3F 第 3 特別会議室）にて、第 51 回国立大学臨床検査技師教育協議会が開催された。20 大学から 56 名の参加者（出席・陪席・列席の総数）があり、天候にも恵まれ盛況の内に終えることができた。

（参加校）

北海道大学、弘前大学、東北大学、群馬大学、東京医科歯科大学、新潟大学、金沢大学、信州大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、鳥取大学、岡山大学、山口大学、徳島大学、九州大学、熊本大学、琉球大学、筑波大学

議事に先立ち、当番校である筑波大学医学群長 原晃教授から開会の挨拶あった。続いて、筑波大学医学群医療科学類長 二宮治彦教授が議長に選出され、議事開始となった。まず、出席者の自己紹介が行われた。次に、平成 25 年度の事業報告および収支決算報告、学部卒業生・大学院修了生の進路状況調査報告等があった。議題としては、平成 26 年度の役員選出、予算案、教育施設の専門分野別評価、国立大学臨床検査技師教育施設の臨床検査学分野における中核戦略、臨床検査残存検体の教育的利用等があげられ、活発な議論が行われた。最後に、照合事項として、大学院進学率、大学院進学率向上のために行っている方策、編入生の受

け入れ状況、学生実習における個人情報の取り扱い等について各大学からの説明があった。



開会の挨拶
原晃教授
（筑波大学医学群長）



議事進行
二宮治彦教授
（筑波大学医学群医療科学類長）

（平成 26 年度役員校）

会長校：筑波大学

幹事校：名古屋大学（前会長校）、山口大学（次会長校）、神戸大学

代表幹事校：北海道大学

会計幹事校：東京医科歯科大学、群馬大学



(参加者の活発な議論)

総会終了後は、大学会館 1F レストラン・プラザにて懇親会が行われ、和やかな雰囲気の中で、臨床検査技師教育のために有意義な情報交換が行われた。

来年は山口大学が当番校として 5 月に開催される予定である。



(懇親会の様子)

筑波医療科学 第10巻 第1号	
編集	筑波医療科学 編集委員会 磯辺智範 二宮治彦
発行所	筑波大学 医学群 医療科学類 〒305-8575 茨城県つくば市天王台 1-1-1
発行日	2014年6月30日